

# 黒人研究学会会報

Japan Black Studies Association Newsletter No.83 (March 30, 2017)

第83号 2017年3月30日

## 例会発表要旨

10月例会 2016年10月8日 立命館大学朱雀キャンパス

### ①誰がコールマンを知り得たのか

——モデル論争から再読する *The Human Stain*

時里 祐子

ユダヤ系作家フィリップ・ロス(Philip Roth)の2000年の作品 *The Human Stain* は、主人公コールマン・シルク(Coleman Silk)が実は白人社会にパッシングしていたアフリカ系であったという設定から、多くの話題を呼んだ。だが、さらに興味深いことに出版当初から、アフリカ系の出自を隠して執筆していた元 *The New York Times* の批評家、アナトール・ブロイヤード(Anatole Broyard)がシルクのモデルではないかという憶測が広がっていた。2012年にロスはそれを否定する公開レターを出したが、本発表では、その公開レターでロスがシルクの実際のモチーフはユダヤ系の人物であったことを明かし、さらにブロイヤードを個人的に知っていたが、その「黒さや白さに関しては」知らなかったとする言説をもとに、作品中のザッカーマンが「知っていた事実」と「知らなかった事実」を軸に *The Human Stain* の再読を試みた。

そもそも本作品は語り手にネイサン・ザッカーマンというユダヤ系の作家が設定されており、ザッカーマンが個人的に知るシルクは、黒人差別冤罪事件に巻き込まれるユダヤ系の元教授という設定である。作品中の黒人差別の冤罪事件は、パスしていたアフリカ系のシルクに降りかかる故に衝撃的であるだけでなく、多文化主義を背景に、黒人社会から白人と同一視されたユダヤ系に降りかかる衝撃として描かれている。また、シルクがユダヤ系にパスする過程は、ザッカーマンがシルクの死後まで知り得なかった、不可知の他者の内的葛藤を再創造した物語として描かれる。本発表では最終的に、シルクの半生を再創造するザッカーマンの語りには、ホロコーストという民族の重い歴史の影が現れていることを指摘し、ロスがいかにユダヤ系の視点からアフリカ系の歴史を見つめ、重い歴史から目を逸らし得ない現代の両者を描きだしたかを考察した。

## ② 続「ボーダーを越境するダイアログ」——南アフリカ文学の潜在力

佐竹 純子

2008年の全国大会シンポジウム「黒人研究と平和:ボーダーを越境するダイアログ」ではアフリカの平和を脅かす米国の影響力について発表した。その続編として、南アフリカ文学が紛争後の平和を構築する潜在力をもつことを、ゼークス・ムダ(Zakes Mda)の作品を通して示そうとした。

ムダは1948年、南アフリカ共和国(以下、南ア)生まれ。1963年にレトに亡命、実験的な戯曲を多く手がけ南アや欧米でも上演され、レトでは住民と共に開発のための演劇活動に取り組んだ。アパルトヘイト後は10作を超える小説を出版、現在オハイオ大学教授で米国と南アの間を行き来する。

ムダの二つの小説、*Many Ways of Dying* (1995)とその続編 *Cion* (2007)の主人公は、トローキという葬式の泣き屋を職業とする不思議な南ア黒人である。彼は、アパルトヘイト末期の暴力や死に満ちた過去を、魔法のような芸術の力によって、平和と笑いに転換させる。続編では、トローキは南アから米国オハイオ州に移動する。アフリカン・アメリカンの奴隷時代とブッシュ政権下の二つの物語が、キルト作りを媒介に次第に重なり合い、差別と裏切りの過去から、平和と共存の未来へと歩みだす物語である。

南アと米国の双方において、植民地支配や人種差別に抵抗してきた黒人文化のなかに、平和を生みだす可能性のあることをムダ作品は示している。今後、ムダと他の南アの作家の作品も含め、南ア文学の平和を構築する潜在力について解き明かしていきたい。

## ③ ジェシー・オーエンス——その生涯と時代

古川 哲史

人種差別と闘いつつ歴史に名を残したアフリカ系アメリカ人のスポーツ選手は少なくない。野球のジャッキー・ロビンソン(Jackie Robinson)やボクシングのモハメド・アリ(Muhammad Ali)など、日本でも映画や書籍を通じて紹介されている。その両者に比べると、ジェシー・オーエンス(Jesse Owens)の知名度は低いであろう。しかし、第二次世界大戦も間近い1936年のベルリン・オリンピックで、100メートル走をはじめ4つの金メダルを取った活躍は、ヒトラーの「アーリア人種至上主義」に打撃を与え、オーエンスの名をオリンピック史、そして世界史に刻むことになった。

例会では、オーエンスの幼少時代からオリンピックでの活躍、その後の経済的困窮や人種差別との闘いなど、彼の波乱に富んだ人生を紹介した。途中、レニ・リーフェンシュタール(Leni Riefenstahl)によるベルリン・オリンピックの「記録映画」から、開会式とオーエンスが優勝した100メートル走の場面を見せた。また、オーエンスにとって、走ることがいかに「自由」と結びつくか、彼にとって、走ることが「生きる力」となっていたかを述べた。

アメリカでは、オーエンスの晩年から没後、彼の偉業が「再評価」されている。本年9月には、米国オリンピック委員会がジェシー・オーエンスの名を冠した賞を新設し、第1回の受賞者にモハメド・アリを選んでいる。公民権運動以前、さらには第二次大戦以前に、人種差別とも闘いながら走り続けたオーエンスについては、日本でももう少し知られてよいだろう。

## ① ミンストレルの陰に——スパイク・リーの *Bamboozled* にみるアメリカ社会と黒人の壁

猪熊 慶祐

2000年に発表されたスパイク・リーの作品、*Bamboozled* (2000)は、映像メディア業界とアメリカ社会を批判する目的としている。本作は、低視聴率に悩むテレビ局が、黒人のステレオタイプを疑いもなく受け入れてしまうアメリカ社会の批判目的とし、19世紀中葉に人気を博したミンストレルショーを復活させることから生じる出来事を中心に展開される。本発表では、「二重性」と「カラーライン」をキーワードに本作を考察した。

作品に再現されたミンストレルショーと地方の酒場を巡業する黒人芸人の漫談を対にして描き、人種をネタにした笑いの可能性を探る。しかし、リーはテレビに出演するミンストレルマン、どさ回りの芸人のどちらもアメリカ社会の成功者としない。そこには、アメリカ社会の黒人に対する期待へのリーの批判が表れている。また、黒人よりも黒人らしいと豪語するテレビ局の白人上司と、黒人らしさを隠すその部下との関係性から、メインのミンストレルの背後にさらなるミンストレルが浮かび上がる。現実の人間関係のミンストレルは、19世紀のミンストレルのように相互作用は生じない。建前という仮面で本音を隠したままカラーラインを超えた関係を築くことはできない。さらに本作は、世界的知名度のある複数の黒人プロスポーツ選手の写真を利用し、黒人芸人同様に、運動以外の才能を持つ黒人像を拒絶する社会を浮き彫りにする。同時にそれは、黒人がスポーツ選手へ抱く羨望に対しても警告を発している。リーはミンストレルショーに要求される二重性を巧みに利用し、単なる映像メディア批判にとどまらず、アメリカ社会が当然のように受け入れてしまっている人種観への警告をしていると論じた。

## ② “We Are Nothing If We Don’t Know How to Die Right”

### ——*Song for Night* における彷徨えるゴースト

岡島 慶

本発表では、ナイジェリア出身の作家 Chris Abani の *Song for Night* (2007)における子ども兵 My Luck というゴーストの「曖昧さ」に注目し、主にポストコロニアル批評の観点から分析を試みた。

本研究の前提となるのは、近年数多く出版されている子ども兵に関するバイオグラフィや自伝が孕む植民地主義の歴史と深く関係する問題系である。これら著作の多くでは、子ども兵は、「経済的」にも「道徳的」にも優れた西洋主体によって救済の対象となるイノセントな他者という枠組みに嵌められ、人道主義的読者の「消費」の対象となってしまう。その最たる例が、シエラレオネ出身の元子ども兵 Ishmael Beah の自伝 *A Long Way Gone* (2007) である。「永遠の子ども」ベアは、「ポストコロニアル・メランコリア」という病的な枠組みに組み込まれ、植民地主義のレトリックを再生産し続ける役割を付与されていると言える。

一方で、生と死、声と沈黙、犠牲者と加害者といった様々な領域を横断する My Luck は、消費可能なメランコリックな他者という一面的な表象を拒む。My Luck というゴーストには、ポスト植民地世界において行使される「死」をも奪われる暴力の強度や、語り得ぬ経験を表象

する沈黙の意味作用など、いくつかの重要な意味が付与されている。さらに重要であると思われるのが、嘆かれ得ぬ生としてのみ存在を許されてきた My Luck が、自身の弔いを行っている点である。My Luck が喪の作業を行う事の意味は、彼が最後に人間としての尊厳を手に入れ、自らの罪とともに人としての「死」を選びとったことの証左となるのである。

### ③ 日本におけるフレデリック・ダグラス研究概観

朴 珣英

アメリカ南部メリーランド州で奴隷として生まれたフレデリック・ダグラス (Frederick Douglass: 1818-1895) は、その生涯を奴隷制廃止運動、黒人の権利獲得運動に捧げた 19 世紀アメリカを代表する黒人指導者である。作家、演説家、新聞発行・編集者、社会改革者、政治家として知られ、3 冊の自伝のほか、1 篇の中編小説、新聞の記事や社説、演説の原稿、書簡や日記などが膨大な資料として残されており、アメリカ合衆国においては主に文学、歴史学、政治学の分野において研究されている。

本発表では書誌学的な観点から、日本において出版、刊行されたフレデリック・ダグラスに関する日本国内の研究活動に焦点を当て、図書(単行本)、図書に収載された論文、学術誌・紀要の論文、書評、翻訳等を紹介した。1950 年代から 2016 年 3 月まで 10 年ごとに時代区分を設け、刊行順および著者の 50 音順に示し、時代背景にも触れつつ研究動向を概観した。

## 報告

### 会員による出版

兼子歩・貴堂嘉之共編、兼子歩・坂下史子他共著、『「ヘイト」の時代のアメリカ史——人種・民族・国籍を考える』(彩流社、2017 年 2 月)、292 pp.

木内徹訳(リチャード・ライト著)『長い夢』(水声社、2017 年 3 月)、492 pp.

神本 秀爾著『レゲエという実践: ラスタファーライの文化人類学』(プリミエ・コレクション) (京都大学学術出版会、2017 年 3 月)、266 pp.

風呂本惇子・松本昇・鶴殿えりか・森あおい共編、『新たなるトニ・モリスン——その小説世界を拓く』(金星堂、2017 年 3 月)

## 会員からの投稿

### Comparative Lecture on Afro-Caribbean Food Philosophy of 'Making Do'

Garcia Chambers

*Food Culture* is one of the topics I teach in a course titled *Selected Cultural Practices of the English-Speaking Caribbean*. Defining food culture as a way of life involving how a group of people think about, source, and prepare food for consumption, this 2-3 week lecture seeks to introduce students to some of the basics of the English-speaking Caribbean food customs and its main philosophy. A food philosophy known as 'making do' is considered an important legacy of slavery and plantation life in the Caribbean. Before explaining what this philosophy is, as well as its background and contemporary currency, let me first mention a pivotal point of approach in teaching this course.

A critical focus point of the course is an attempt to apply where possible a comparative lens by asking students to consider how similar or different their own culture is. This no doubt offers a challenge to students to do a bit of research and to consider taken-for-granted customs and values of their own culture. Guided by Edward Hall's dictum that "culture hides more than it reveals, and strangely enough what it hides, it hides most effectively from its own participants" (p. 39), the course encourages students to recognize that by studying cultural differences, and especially being shocked by them, they are able to develop most importantly a better understanding of their own culture. As such a lecture on the 'making do' philosophy that undergirds the Afro-Caribbean food culture allows students to cast a reflective eye on their own Japanese food culture.

To *make do* with whatever one has is a pragmatic and an applied philosophy in general; however, to specifically make do with the *food* one has is a materially survival philosophy. Characterizing it as having autochthonous African roots that bore fruit (no pun intended) in the fertile ground of plantation slavery and servitude, Houston succinctly defines 'making do' philosophy of Caribbean food culture as "...using whatever is on hand or whatever can be found and using everything that is available" (p. xxv).

The fact is slaves on the plantation had very little food and often had to *make do* with the leftovers from their masters' table. Moreover, when slavery ended, yes the shackles were removed from their feet, but feeding themselves as a free people proved to be burdensome. Since they did not have the economic resource to import some of the food they would normally eat as slaves on the plantation, they had to be satisfied with improvising and using whatever food they had grown on the small plots of land they had. This philosophy of a positive mindset to eke out their existence on the little they had by wasting nothing, storing leftovers to re-use later, and improvising when a particular ingredient for preparing a dish was not available, led to new and

tasting dishes. One such example is the famed one-pot pepper-pot dish, which is a hot and spicy vegetable-filled soup with available meat and or fish, whether leftover or fresh, and whatever ground provisions could be sourced from their small farms or a local market. Notably also is that this philosophy of *making do* has led to the creative intermixing of cooking methods and food brought by the Indian and Chinese indentured laborers who came to the Caribbean as contract workers after slave labor was abolished.

However, this *making do* philosophy of Caribbean food culture inexorably contains certain negatives. Primarily, it emerged from conditions of dire economic plight which followed the legal ending of plantation slavery and servitude. Furthermore, “having to make do as opposed to choosing to make do” has been most unfortunate because as Houston explains, it “affects both the quality and diversity of foods consumed...”, which has serious implications for health (p. xxvii). Conversely, *making do* underlines certain positives: trying out new and different ingredients is both enhancing their culinary skills and mentally liberating; fusing of African, European, Indian, Chinese, and Native American culinary methods; and reducing wastes by storing left-over for later use.

Comparatively, this approach to food: not discarding, but instead storing and re-using leftover has always struck a chord with all students especially when the class comprises all Japanese natives (occasionally there are foreign exchange students). It mirrors the Japanese philosophy of *mottai nai*, which bemoans and decries when something useful is being wasted or not fully used up. So the admonition of mothers and grandmothers especially to children to leave not even a grain of rice, to eat up everything as farmers labored tirelessly to produce it is *mottai nai* philosophy at work. Its slogan known as the 3 R’s (*reduce, re-use, recycle*) was popularized by the Kenyan political and environmental activist Wangari Maathai, who even added a fourth R, *respect*.

We’ve reasoned in our class discussion that both *making do* and *mottai nai* are positive responses to a negative situation. *Mottai nai* philosophy is said to have guided the thinking of surviving the food crisis that Japan faced during and the aftermath of their WWII defeat, while *making do* was essential to cope with the harsh economic realities of the newly freed slaves in the Caribbean post 1834. In the Caribbean’s case especially, its food philosophy has led to new culinary ideas and skills, though there were health implications of having to be forced to be frugal and do without certain nutritional foods.

*Mottai nai* as a philosophy does have broader cultural antecedents and applications in Japanese culture and so does *making do* as a philosophy especially in influencing economic activity among Caribbean women (Houston, 2005), but these points were outside the scope of this comparative-focused lecture.

#### **Works cited:**

Hall, E. T. (1959). *The Silent Language* (Vol. 3, p. 1959). New York: Doubleday.

## 入 会 者

河野 世莉奈(こうの せりな)氏

所属:九州大学大学院博士後期課程 3 年

自己紹介:修士のときから Toni Morrison を中心に、アフリカン・アメリカン文学を研究してきました。現在は Morrison 作品において、登場人物の服装や持ち物などの描写から、主に女性表象の考察を行っています。アフリカン・アメリカン文学・歴史・文化をご専門とされる先生方が多くいらっしゃる黒人研究学会にこれから積極的に参加し、たくさんの刺激を受け、より一層知識を深めていきたいと思っております。どうぞよろしくお願い申し上げます。

宮田 真澄(みやた ますみ)氏

所属:都留文科大学大学院修士課程 1 年

自己紹介:はじめまして。都留文科大学大学院修士課程 1 年の宮田真澄と申します。私はトニ・モリソンを中心に研究しており、卒業論文では *The Bluest Eye* について執筆しました。修士論文では *Beloved* について論じるつもりです。*Beloved* に関連し、アフリカン・アメリカンが民族として抱えるトラウマ、ジェンダーや人種問題に興味を持っております。最近ではアフリカ系だけではなく、アジア系などのマイノリティ文学も読んでおります。これから例会や全国大会に参加し、勉強させていただこうと思っております。よろしくお願いいたします。

LaTeeka Gray(ラチカ グレイ氏)

所属:インディアナ大学ブルーミントン校

自己紹介:I am currently an Anthropology PhD student at Indiana University, Bloomington. My dissertation centers on the African-American population in Japan. My research interests include Afro-Asian sociopolitical interaction, community networks, and ideologies surrounding Black identity. In my work, I explore the potential applications of social network and cultural consensus analyses in the study of hard-to-find populations and transnational networks.

(順不同)

## 編集後記にかえて

昨年夏、映画「栄光のランナー(原題は“Race”）」を見に行った。2016年リオ・オリンピックの陸上で三つの金メダル(100m、200m、400mリレー)を取ったウサイン・ボルト(ジャマイカ)が話題になったが、この映画の主人公ジェシー・オーエンス(アメリカ)はベルリン・オリンピック(1936年)でさらに走り幅跳びでも優勝し、合計4つの金メダルを獲得した。彼はアフリカ系アメリカ人、黒人であるがゆえに様々な差別を受ける。ベルリンでヒトラーは彼との握手を嫌って会場を予定より早く後にし(アーリア人種の優位性が証明されなかったため怒った)、本国アメリカでオーエンスはパーティー会場のホテルに正面玄関からではなく裏口から入らされる、等々。しかし、「走る間だけは、自由だった」「走ることは、生きること」という彼の言葉はさまざまな意味で心に響く。この感動的な映画が人々に知られていないのか、上映している映画館が少なく、神戸でも午前中一回、二日間の上映だった。しかも私が入った座席数100ほどの小シアターに観客は7名だけで、まことに残念であった。

(井上 怜美)

~~~~~

＜編集＞ 黒人研究学会・編集部  
〒603-8577 京都市北区等持院北町 56-1  
立命館大学文学部・坂下史子研究室気付

＜編集者＞ 井上 怜美

ホーム・ページアドレス  
<http://home.att.ne.jp/zeta/yorozuya/jbsa/>

~~~~~